



「東南アジアセミナー」臨地研修

福井捷朗*

本センターが広く一般から募集して行うこのセミナーも、今年で第12回目を迎えた。恒例により所長を長とするセミナー委員会が組織され、坪内良博教授、桜井由躬雄助教授、中川敏助手、それに小生が委員となった。今年のテーマは、「フロンティアとしての東南アジア」であった。

工夫も考えられてよいのではなかろうか。にみられる東南アジア理解の問題意識を反映している。すなわち東南アジアは、歴史的にインド・中国に較べて相対的に人口希薄な地域であり、それは今日にまで及ぶ。この人口希薄性は、東南アジアの諸相に反映されているはずである、と考えるのである。

域外からみれば、東南アジアの全体が歴史的にフロンティアであったであろう。19世紀を境とする人口の急増期に入れば、急激な耕地拡大とそれに伴う移住が起こり、いわゆるフロンティア（開拓前線）が各地で出現したであろう。しかしフロンティア性は、開拓地にのみあるのでは決してない。都市もまた、そこに内外からの人口が流入し、不断に生産が拡大し、新しい文化が創造されていく場所として、優れてフロンティアである。このように人口の時空間的变化を踏まえ、フロンティアなる語を多義的に用いた上で、今年のセミナーのテーマが浮かび上がってきたのである。東南アジア理解の切り口として、このアプローチの有効性を考えようとしたのである。

今年のセミナーの最大の特徴は、何といても臨地研修を初めて取り入れたことであろう。セミナー期間2週間をふたつに分け、前半を例年通り京都で行い、後半の1週間をタイ国で行なったのである。再び海外研修の機会が巡ってくるかどうか

かは分からないが、今後の参考のためにも、雑事を含めて報告しておく。

海外研修に参加した研修生は、合計25人であった。その内訳は、学部生10人、院生11人、大学教官3人、その他1人であった。男女別では女性8人、男性17人、年齢別では10代1人、20代18人、30代4人、40代、60代各1人であった。これらの構成からみる限り、例年と大きく変わったところはないと思われる。専門分野別でみると、自然科学系が7人おり、その内5人が農学関係であった。残る18人の内4人が経済、2人が歴史、12人が社会人文系のその他の分野であった。25人中、今回が初めての海外旅行であった者は6人おり、残りの19人のうちタイ国は初めてという者が11人、8人がタイ国旅行の経験をもっていた。

タイ国におけるセミナーは、講義の部分と旅行の部分とに分かれる。前者には、タイ国を代表する4人の学者を煩わした。時間に沿って記せば、タマサート大学チャーウィット教授によるバンコク成立史、芸術大学シーサク教授による古代集落から近代都市に至る居住史、チュラロンコン大学ではプラサート、チャティップ両教授から、それぞれ都市、農村の社会について、それぞれの大学の講義室を借りて、英語で講義を受けた。それぞれの講義の後には、かなり活発な質疑応答があった。もっとも中にはいささか見当はずれな質問もあったが、これはやむをえぬことであろう。

日程からいうと、タイ国における第1、2日目の午前中は上記の講義にあてられ、それぞれの午後は、チャオプラヤー河をアユタヤへ遡る舟行と、バンコク中国人街の散策にあてられた。3日目からバス旅行となり、東北タイの中心コンケン市に向い、4日目にはドンデーン村を訪れた。この村は、故水野浩一教授が1964年に初めて調査し、1981年からは本センターを中心とする多数が学際

* Hayao Fukui, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University



芸術大学(シンラパコーン大学)考古学部前にて



ドンデーン村の野良にて

的調査を行なってきた村である。

炎天下の村と田圃を30人近くの日本人が3時間もうろつき回ったのは、村人にとってではなくても、まさに異彩であった。コンケンの朝市で買って来た焼き鶏、ソムタム(未熟パイヤの和えもの)とおこわで、野良で昼食をとった。食後、紙製のコップ、皿などをひとまとめにして処分しようとしたとき、同行していた村の老人がひたたくるようにしてそれを奪い、怒ったような声で「使う」という。その途端わたくしは、全村民の系図を頭に収めているこの記憶力抜群の老人の矜持と、どうしようもないほど大きな私共と村人との貧富の差が結合したものと分かった。そして、そのことが頭では分かっているにもかかわらず行動を伴っていない自分としては、ただ恥じ入るばかりであった。ケン爺さんにまたひとつ借りができてしまった。

同じ日の午後遅く、日本政府援助によって4年前に設立された東北地域農業開発研究センターを訪れ、まずドンデーン村での渴きを癒した後、所長のパイブーン氏から東北タイ農業全般について説明を聴き、所内を見学した。

5日目はコンケンから一路西へ向い、ナムナオの松林のある国立公園を越え、ロムサックでパサックの谷の豊穡を目にし、カオコーの焼き払われた山地を過ぎ、中央平野のピサヌロークへと下った。

翌、6日目の最終日にはスコタイの遺跡を訪れ、ここで初めて観光コースとなった。しかし、そこ

では貯水池の機能を巡って講師間で論争が展開され、それがかえって研修生を喜ばせることになった。エンジントラブルのためバスが遅れ、チャオプラヤー河灌漑網の元締めであるチャイナート井堰をみることはできなかったが、この穀倉地帯を縦断し、バンコクへと戻った。

以上に日程の概略を述べたが、わたくしがかえりとも精力を費やしたのは、バスが止まっているときよりも動いているときであった。桜井助教授が歴史、社会の大枠を説明し、わたくしは車窓に見えるものについて逐一、相手が眠っていようが声が囁れようが構わずに、マイクを片手に喋り続けた。これは研修生諸君が自らの目でものをみるのかえって妨げたのではないかと反省している。

最後に、海外セミナーという初めての企画に参加して、改めて本セミナー自体について考えさせられたことを述べたい。それは研修生の多様性と関係する。年齢、専門、経験などについて多様であること自体は結構なのであるが、将来東南アジアを対象とする研究者たらんとしているか否かの別が、1週間の旅行を共にすることによって、ますます明らかになった感がする。一般教養としての参加と、研究者の卵としての参加をなんらかの方法(例えば、それぞれの隔年募集)で区別する工夫も考えられてよいのではなかろうか。

(京都大学東南アジア研究センター教授)